

米の話

高田 友

(一)

如今は三食米を喰ふ人は尠し。或は蕎麥・饅頭、或はパン、果は海の物とも山の物とも知れぬバスタ杯といふ毒物を攝取したためらふなし。君知らずや、パスタの毒、煙草よりも甚だしきものありとは。紀州のドンファンは、眞は覺醒劑にあらで、マカロニを無理強ひせられたるがゆゑに難に遭ひたりとは知る人ぞ知る天下の祕話なり。何爲期するを得けん、マカロニ、ひとたび人體を侵すや、魔訶不可思議なる毒素と化して大腸の一端に憩室なる瘤贅を生じ、此處に炎症を誘發し、つひに老翁をして死に至らしめんとは。

かつて皇朝の人は、朝に晝に夕に米を食ひて倦まず。これによりて、忠勇無雙なる臣民の育成せられて世界に冠たる大和民族出現するに至れり。然而、昨日今日、若者の悉皆洋鬼となりて腦細胞の闕失したるは、本場米國のYankiesに倣ひて、パンを喰ひたればなり。米を食へば、五臟六腑の洗淨せられて、高天原より降り來りし清淨無垢の民族へと回歸するを得んに。已哉、已而機を逸せりといふべきか。

米國に「米」あり、ジャパンに「パン」あるは、「爪にツメなし、瓜にツメあり」の類なれど、我儕、日本文化の復興を目指して、盍ぞ「ジャパン」の「パン」を放逐せざる。

かつて我儕が先祖は、一食に一合の米を腹中に入るるを常としたりき。否、一食に喰

ふ米の量を一合とこそは名づけたりけれ。

一日三食、年三百餘日。これを乗ずれば年ごとに大略千度米を食ふ。その量をぞ一石とは言ふなる。然則、一石の千合なるに符合す。かくして、一石は十斗にして、百升かつ千合なるに及べり。

「石」の音は「いし(stone)」の義なるに於ては「セキ」なるに、容量單位にては「コク」なり。奇ッ怪なるかな。「石」と「斛」はいづれも周代より同義の容量單位として用ゐられたれば、漢字の本朝に渡來したる後「斛」の音の「コク」なるによりて、「石」も其の義なる時には「コク」と讀むに至れり。此の類を「借音」と言ふ。借音は唐土にて発祥したるに、これが「コク」は本朝独自の借音にして、彼の國にては元來「石」には「コク」に該る義はあれども音はなし。然るに、現代中國語にては、「石」は通常は石の音なれど、容量單位の爲には、danと讀む。同義なる「擔(担)」(現代中國語にてはdan)の借音と言はるるが、「擔」はそもそも「一擔ぎの荷」の謂ひなるに、「石」は遙に巨大なるを指稱すれば、かれを以てこれに充てたるは牽強付會と言はざるを得ざらんか。あるいは、後述の如く、一石の米は百五十キログラム 疋なれば、屈強の力士の擔ぐを得る最大の重量との理りならんか。

(二)

一石の米を穫る田地の面積を「反」といふ。「反」の音は「ハン」なるに、「タン」と讀むは同義なる「段」の借音なり。「段」は漢音「タン」、吳音「ダン」なり。

一反は十畝じっせ。一方、一畝は三十歩ぶなり。「歩」は現代の本朝にては「坪」と言ふ。「つぼ」

は國訓にして、本來「坪」の字は、「山間の平地」の義なり。然れども現代中國語の方言にて「坪」は本朝と同じ面積單位に用ゐらるれば、怕^{おそ}るらくは、全き國訓にはあらざるべし。右に述べたる換算式を用ゐれば、一反は三百坪なり。一反は一石を産すれば、則ち一坪とは三合、換言すれば一日三食の米を産する田地の面積なり。現代中國語にはこの「反」の語法なし。面積の「坪」、唐土にては「步^ぶ」といふ。

大閤檢地より以前には、一反は三百六十坪なりしとなん傳へらるる。三百と言はんよりも年の日數^{としひかず}に近似して、一日三食を一年を通して給するに不足なし。然れども、秀吉の度量衡を改めたる所以は換算を手易くせんとの計らひに出づるにあらで、只管^{ひたすら}年貢の増量を圖らんが爲なり。出自^{ひやくせい}百姓なるに、百姓を思ひやることなくして、苛斂^{かれんちゆうきつ}誅求に努めたりとは。

(三)

「こめ」なる日本語の語源は「小實^{こみ}」が通説なり。單に「小さき實」と言ひたるなり。

漢字「米」の字源は、「十」即ち稻の穂の象形、四方の點は實を描きたり。

米には、粳米^{かうまい}と糯米^{もちいめ}とあり。

糯米は健康食として知らるる所、肥滿を防ぎ、血糖値を下ぐるに效あり。

粳米と糯米は生物學的に如何なる差異やあると思ひ給ふ。「秋田こまちの糯米」などの賣らるるを見れば、品種の違いにはあらざらんと思はるるが、豈^{あにはか}圖らん、粳米は優性、糯米は劣性の遺傳形質の差に出でたりとは。

新村出^{しんむらたけ}の語源説によれば、「うるち」は梵語に由來すとの儀。梵語にて「米」をウリーヒ

(wini)と申ししかど、日本語に入りて、「うるしね」となり、轉訛して「うるち」とは變れり。新村博士の進んで説かるるには、ヴリーヒの西方へ傳はりて英語の corn の元とはなれりけりと。あるいは、インド・ヨーロッパ祖語にて、これが類語の「米」を指稱せしか。

「餅」は保存食となるがゆゑに、「持ち（長持ち）」より轉じたり。

ただし、「餅」なる漢字は唐土にては「もち」の意には非ず。中日辭典に檢するに、「月餅」なる菓子を見れば察せらるるがごとく、「小麥粉を捏ねて薄く圓盤狀に伸ばし、平なべで焼くか蒸すかした食べ物の總稱」とあり。「煎餅」もその類なれど、本朝にて小麥に非ずして米を用ゐるは唐土の人の訝る所なり。現代中國語にては、本朝の餅の類には「饅頭」なる漢字を宛つ。

「米」を「よね」と言へるあり。その語源は如何。前述「うるしね」の「しね」が「死ね」に通ずるによりてこれを忌み、「あし（葦）」は「悪し」なりとて「よし（良・吉）」と言ひ換ふるが如く、「良ね」と言ひ替へ、「うるよね」と謂ひたるが、「うる」の脱落して、「よね」なる語の獨立せりとぞ言はるる。

本朝は「豊葦原の千五百秋の瑞穂の國」なり。「千五百秋」の「ちいほ（發音はチイオ）」は數の多きを言ふ。「秋」は年月の謂ひにして、「數多き年月」とは「永久」の意。「豊葦原（綠豊かなる地）にして久遠に已まず稻の澤に實る國」とは即ち日本國の美稱なり。されば、我國は永遠の穀倉にして、「米」こそ皇國の皇國たる所以なれ。

「こめ」と言ひ、「よね」と言ふ。而して、生育の途上にありては、「いね」とも申し、美

稱として「みづほ」あり。炊けば則ち「いひ（めし・ごはん）」、人體より排出せらるれば「くそ」となる。「糞」の上部に「米」あるを注視せられよかし。宜なるかな、「糞」とは米の一形態にあらざや。寔に出世魚にたぐふる名を與へたる、流石は米にて生くる國と言ふべし。因みに、萬葉にて「かれひ（餉）」とあるは「かれいひ（乾飯）」の約にて、炊飯したる、もしくは蒸したる米を干して、携帯口糧とは爲したるなり。「かれ」は「枯れ」に通ずるならん。

(四)

米（精米）一合は約百五十瓦（グラム）なり。炊けば二倍以上に膨れ上がり、三百瓦乃至三百五十瓦になる。單身者の自炊するに於ては、一食六十圓と算定せらる。

江戸中期には、一兩とは米一石を賄ふ代金なりと信ぜられてありしが、さは、この時期のみの儀なりき。天正のころほひ（信長秀吉の頃）には、一兩にて米四石を買ふを得たりと傳へらる。秀吉に天正大判、家康に慶長大判・慶長小判あれど、江戸中期には悪貨に改鑄して金含有率の下がりたるがゆゑにインフレに陥りたるなり。

されど、江戸中期を基準として、米の價格と兩の價值を算出せん。

一合百五十瓦なれば、一石は百五十瓦キロ。現在米百五十瓦は約六百圓。百五十瓦すなはち一石六萬圓。これ一兩なりき。

於是、一兩とはほぼ六萬圓とぞなりたりける。

(五)

水の一合は百八十瓦なり。米の一合は百五十瓦。米は水より軽きかと思ひきや、炊飯前の釜を見れば、米は水の底に沈みてあり。米の水より重きは論を俟たず。こは如何にと惑へども、吃驚したまふなかれ。米を升ますに入いるれば、米と米の間に空隙ありて、升中の容積、空氣の占むる所大なり。仍よつて、米と空氣を合算したる平均密度は水よりもちひさく、一合の質量の百八十瓦に達せざるは異とするに足らず。宜むべなるかな、電子核と電子の間に膨大なる空隙ありて、壓縮せらるれば中性子星の出來しゅつたいすると同じ理ことわりなり。

米の中に宇宙あり、萬物創成し給ひし耶和華えほばもしくは高御産巢日神たかみむすびのかみの然らしむる所と看破せられよかし。

(令和三年五月十五日受附)